第１９話　蝦夷征伐と三韓の分離

東の蝦夷と北の蝦夷。 阿倍比羅夫が２００艘の船軍を率いて、今の北海道から樺太の方までも進んで粛慎を討った。 朝鮮では、ついに新羅が百済を滅ぼした。

重祚の始め

孝徳天皇は在位10 年でお崩れになった。　当然、皇太子の**中大兄皇子**が御位にお即きになるべきでしたが、まだ新政が始まったばかりの時で、なさらねばならない事が多かった為でもあったか、ご即位にはならず、御母の**皇極天皇**が再び御位にお即きになった。　これを第 37 代**斉明天皇**と申し上げます。

このように天皇が一旦御位を譲られた後に、再び天皇になられることを重祚と申します。　わが国ではこの時が始めで、後の奈良時代にもう一度あります。　**中大兄皇子**はやはり皇太子として政治をお輔けになった。

斉明天皇の御代には、いよいよ新政を広く一般に行われて、朝廷では何かとお忙しかったが、なおその上に、蝦夷の征伐をなされたり、百済へ援兵をお出しになったりした。

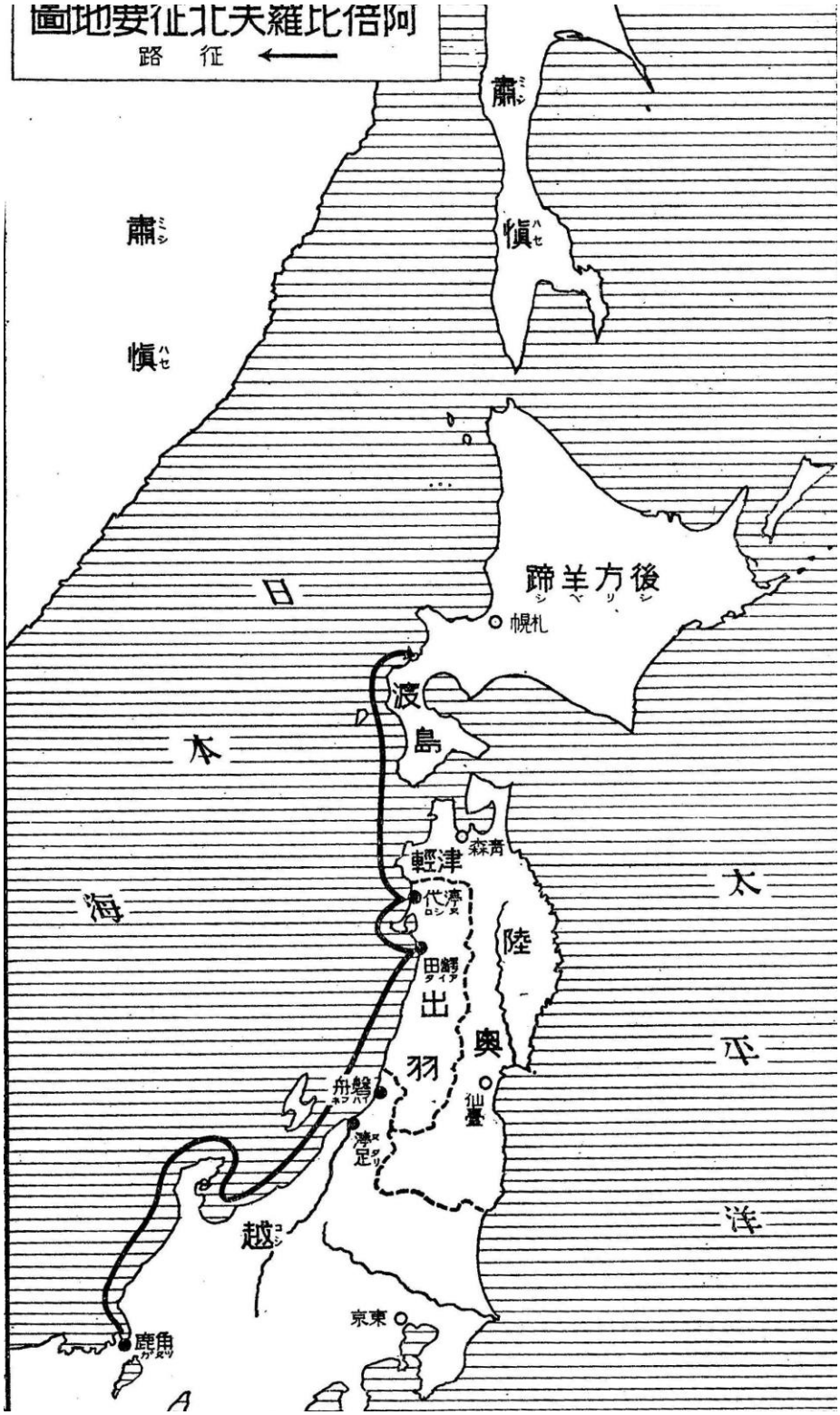
蝦夷の叛服

そもそも蝦夷は、**景行天皇**の御代に、**日本武尊**のご征伐で一時全く平定しましたが、その後もたびたび叛いて貢物を納めなかったり、乱暴を働いたりしたので、その都度、朝廷では兵を出してこれを討たせられた。　けれども、野蛮な土賊のことですから、討てば直ぐに鎮まるけれども、忽ちまた叛いたりして少しも信用が出来ません。　まことに厄介な事でありました。

上毛野形名とその妻

舒明天皇の御代に叛いた時には、**上毛野形名**を将軍として討たせられたが、賊の勢いが中々強くて、**形名**は破れて壘に逃げ込みました。　賊は勢いに乗じてこれを囲んだ。　**形名**の兵は既に悉く逃げてしまい、壘は全く空っぽになっていたので、**形名**はいかんともすることが出来ずに、途方に暮れたが、折から、日が暮れたのを幸いに、垣を越えて逃げようとしました。

その時、**形名**の妻は、蝦夷のために殺されようとするのを歎き、「昔、あなたのご先祖は、遠く海を越えて新羅をご征伐され、武名を後の世に伝えておられます。　今、あなたがご先祖の名を辱めたならば、後の世に嗤われるでありましょう」 といって、酒を酌んで夫を励まし、自分は夫の剱を佩き、ありたけの弓に弦を張らせて、数十人の女共に命じて盛んにその弦を鳴らさせた。



そのうちに、**形名**も勇気を振い起こして、起って、敵に向かって突進したので、蝦夷は、軍兵がまだ壘の中に大勢いるものと思い、恐れてやや引き退いた。

それを見て一旦逃げ散った兵らがまた集まって来たので、**形名**は更に勢いを盛り返して、大いに蝦夷を撃ってその悉くを虜としました。

安倍比羅夫の征伐

この**形名**が討った蝦夷は、今の常陸（茨城県）から陸奥（宮城県）の方面、即ち太平洋沿岸に蔓っていたもので、これを東の蝦夷というのに対して、今の越後（新潟県）から羽前、羽後（秋田県）の方面、即ち日本海岸にいたものを北の蝦夷といっていたが、**斉明天皇**の御代にはこの北の蝦夷が叛いたのです。

朝廷では**安倍比羅夫**に命じてこれを討たせられた。　**比羅夫**は180艘の船軍を率いて、日本海岸に沿って北に進み、今の秋田、能代地方の蝦夷を降服させた上に、今の北海道の蝦夷らをも呼び集めて、ご馳走をして還してやった。　なついて来る者はいたわってやるのが、我が朝廷の昔からの例になっていたのですから、彼れもまたそれに倣ったのでしょう。

しかし、　野蛮な蝦夷らは、すぐまた叛いていたものと見えて、**比羅夫**は、その翌年また同じ航路を征伐に赴いている。

更に翌々年には、200艘の船軍を率い、北蝦夷を案内として、遠く北海道から樺太の方まで進んで粛慎を討ちました。　この粛慎というのは、蝦夷とはまた別の種族でして、何かといえば蝦夷をおだててわが国に叛かせていた。　それで、これから後は蝦夷は暫くは静かでありました。

百済に援兵を出す

ところが、一方、三韓はどうかというに、先に**欽明天皇**の御代に、任那の日本府が滅びてからは、わが国の朝鮮における勢力は次第に衰えました。　それでも、百済は勿論、高句麗も、新羅も、貢物は以前と同じように奉っていたのですから、わが国とそれらの国との関係は少しも変わりがなかった。

けれども、三国の間では、絶えず互いに攻め合ったりして、殆ど平和な日がありませんでした。　とりわけ新羅はますます勢力を得るにつれて、常に百済を攻めてこれをいぢめていた。　**斉明天皇**の御代には、その頃に中国で盛んであった唐に新羅はうまく取り入って、その援けを借りて、百済を全く滅ぼそうと企てた。　それでなくても勢力の弱い百済は大いに困り、わが国に救いを求めて来ました。

百済、高句麗の滅亡

正しきを扶けて無道を討つのは、わが朝廷の昔からのご方針ですから、**斉明天皇**はその請いを容れて直ちに援兵をお出しになり、皇太子**中大兄皇子**をお連れになって九州に下られ、筑前の朝倉宮に大本営を置いて、親しくこの援軍をお統べになった。　女帝の御身で、既にご老年でもありましたのに、いかに御心の雄々しくおわしたことでしょう！　しかし不幸にして、天皇は間もなくご病気のためにその朝倉宮でお崩れになったので、即ち**皇太子**が御位に即かれた。　第 38 代**天智天皇**であります。

天智天皇もまた続いて援兵のお指図をなされて、百済を助けられた。　しかし一方で、百済の国内で君臣の間に不和を生じ、王は敵国の謀とも知らずに、その最も功労のある臣下を殺したので、上下の心が全く一致しなくなって、折角わが国から出した援兵もその功を収めることが出来ず、度々敗戦がつづいて（訳者注：663 年の白村江の戦い）、ついに百済は新羅のために滅ぼされました。

天皇はその形勢をご覧になって、この上、永く海外に兵を出しておいては、ただ不利益を増すばかりであろうと考えられて、ついに命じて軍を引き上げさせられました。　それがために高句麗も間もなく唐に滅ぼされて、朝鮮は新羅の一国に統一せられ、三韓は全くわが国から離れてしまった。　しかし、新羅はなおわが国を恐れていたので、その後も時々使いをよこして貢物を奉りました。　それで朝廷では、いつまでも新羅を属国同様に待遇されていました。

（**第１９話　蝦夷征伐と三韓の分離**　終わり。　次は一旦前頁に戻り、**第 20 話**　大宝の律令　へ）